

大学と戦争

2015年7月31日

慶應義塾の昭和二十年—空襲、戦死、終戦

今年も「慶應義塾と戦争 III」の展示会にでかけた。今回はシリーズ3回目の「慶應義塾の昭和二十年」だが、三田図書館の展示会場では空襲、戦死、終戦の3つコーナーが設けられていた（別会場では、疎開、動員、占領）。ちなみに、1回目の「慶應義塾の昭和十八年」では学徒出陣がテーマだった。

さて、全国で最大の空襲被害を受けた大学が慶應義塾とは知らなかった。三田の図書館は昭和20年5月の深夜の空襲で炎上したが、色彩の美しいステンドグラスの欠片が当時を物語っている。

慶應関係の戦没者は2200余名、うち特攻隊は32人、回天関係は5人。特攻隊上原良司（経済学部1年で学徒出陣）は知る人ぞ知るだが、その妹が出撃直前に特攻隊の会話を青ペンで記録した手帳が展示されていた。読むと冗談まじりの雑談だが、それがよけいに悲しみをさそう。

回天特攻で戦死した塚本太郎（同じく経済学部1年で学徒出陣）は出陣の際、別れの言葉をレコードに吹き込んだ。当時の高揚精神から溢れ出る言葉が、独特の抑揚をもって展示場に生々しく流れていた。帰省時の家族全員の最後の写真には、海軍帽を深々と被る塚本の凜々しい写真がある。塚本の母は後に息子の名を付した銭湯「太郎湯」を開業するが、その玄関前にひとり立つ母の写真がなんとも切ない。ちなみに、1回目の「慶應義塾の昭和十八年」の学徒出陣では、出陣を前に婚約者に残した写真立て（片山崇、特攻出撃で戦死）がそっと置かれていた。

学徒兵木村久夫の遺書—学ならざるは更に悲しき

戦没学徒の遺稿を集めた『きけ わだつみのこえ』はよく知られているが、なかでも木村久夫（旧制高知高校、京都大学経済学部）の遺書は特に重要とされている。（無実の罪で）戦犯に問われ28歳で処刑されるまで、独房のなかで田辺元『哲学通論』（岩波全書版）の余白にびっしり書かれた遺書は、次のような書き出しで始まる。

「死の数日前、偶然にこの書を手に入れた。死ぬまでもう一度これを読んで死に就こうと考えた。…数日後には断頭台の露と消える身ではあるが、私の情熱はやはり学の道にあつたことを最後にもう一度思い出すのである。

この書に向かっていると、どこからともなく湧き出ずる楽しさがある。明日は絞首台の露と消ゆるやもしれない身でありながら、尽きざる興味にひきつけられて、本書の三回目の読書に取り掛かる。 昭和21年4月22日」

（加古陽治編著『真実の「わだつみ」』東京新聞、2014年、41ページ、傍点石川）

私はそれに続く木村の生の声（遺書）を、それこそ何度繰り返し読んだことか。そのことは、木村の父宛のもう1通の遺書の次の言葉に通じる。

「…（中略）次に思い出すのは何と言っても高知です。境遇および思想的にも最も波乱に富んだ時代であったから、思い出も尽きないものがある。…私が生きていれば思い尽きない方々なのであるが、何の御恩返しもできずして遙か異境で死んでいくのは残念だ。私

のすべてが芽生えたのはこの時であったのであるが、それも数年とは続かなかった。せめて一冊の著述でも出来得るだけの時間と生命とが欲しかった。これが私の最も残念とするところである。」

(同書 21-22 ページ、傍点石川)

木村は遺書とともに短歌を記している。ここでは、次の2つだけ記しておきたいと思う(同書 29 ページ)。

かにかくに思いひは凡て盡きざれど 学ならざるは更に悲しき
おののきも悲しみもなし絞首台 母の笑顔を抱きて征かなむ

※ちなみに、私が子供の頃(昭和 20 年代後半)、実家から歩いてもすぐだった旧制高知高校の南溟寮(なんめいりょう)でよく遊んだが、その旧制高校の面影漂う風景が、教官の住む古びた官舎とともに、今でも脳裏にある。

現世への触感—吸う一息、吐く一息、食う一匙

「吸う一息の息、吐く一息の息、食う一匙の飯、これらの一つ一つのすべてが、今の私に取っては現世への触感である。昨日は一人、今日は二人と絞首台の露と消えていく、やがて数日のうちには、私へのお呼びもかかって来るであろう。それまでに味わう最後の現世への触感である。今までは何の自覚なくして行ってきたこれらのことが、味わえばこれほど切なる味を持ったものとなることを痛感する次第である。」

(同書 59-60 ページ、傍点石川)

此の世への名残りと思ひて味ひぬ 一匙の菜一匙のかゆ
雨音に鳴く夏虫の声聞きて母かと思ふ 夜半に目覚めつつ

(42、48 ページ)

人間への大きな試験

最後に、どうしても触れておきたい木村の声がある。

「この頃になってようやく死ということが大して恐ろしいものではなくなってきた。決して負け惜しみではない。病で死んで行く人でも死の寸前にはこのような気分になるのではないかと思われる。時々ほんの数秒の間、現世への執着がひょっくり頭を持ち上げるが直ぐ消えてしまう。この分ではいよいよあの世へのお召しが来ても、大して見難い態度もなく行けそうと思っている。何を言っても一生においてこれほど大きい人間への試験はない。」(同書 29-31 ページ、傍点石川)

父への遺書の最後。「もう書くことはない、いよいよ死に赴く。皆さま、お元気で、さようなら、さようなら」。

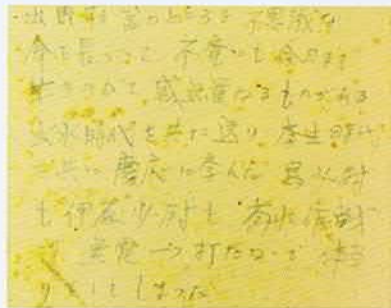
そして、辞世の歌のあとに、「お骨は届かない、爪と遺髪とをもってそれに代える」。

最後の一行、「処刑半時間前擱筆す」(以上、同書 34、36 ページ)。

※木村の遺書、とりわけ研究者の道を志していた木村が志半ばで命を奪われた無念に思いをはせるとき、戦後 70 年、戦争のない平和を思わざるを得ない。

戦死

慶應義塾関係の戦死者は、これまでに2200余名が確認され、そのうち航空特攻は32人(陸軍4人、海軍28人)、「回天」関係の死者は5人(1人は殉職)。ここでは、特攻関係を中心に、死に直面させられた彼らが、複雑な心情を抱いていたことの一部を紹介したい。



特攻出撃直前の記載が残るノート(奥村周一)

昭和20年4月23日条(部分)

海上自衛隊鹿屋航空基地史料館蔵

奥村は法律学科1年で学徒出陣。「航空理論」と表題のあるこのノートの末尾には、出撃直前の手記があり「学生時代を共に慶應に学んだ鳥(澄夫)少尉、伊藤(英次)少尉も…体当たりをしてしまった」とあり、次ページには「愈々出撃ノ秋来タル」と、20年4月28日の特攻戦死当日の記載がある(海軍・第3早稲隊)。

塾生時代を懐かしむ言葉を綴る葉書(山本義雄)

昭和20年4月8日(消印) 山本孝太郎氏寄贈

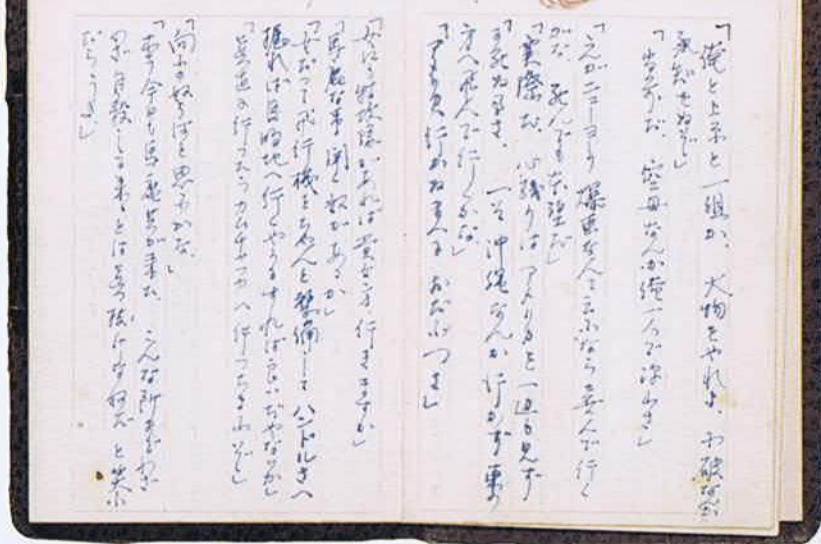
山本は経済学部1年時、学徒出陣で陸軍入営。余白を惜しむように細かい字で書かれたこの葉書には、「今日は一寸東京に行ったついでに慶應に行ってみましたがすでにあのまぼろしの門は応召、がらんとした教室にならぶ机のほこりも淋しく学生時代がなつかしく思はれました」などと記す。山本は同年8月10日、戦歿。



回天搭乗員の名札(瀬川清)

昭和19-20年 瀬川清氏蔵

瀬川は文学部予科2年で学徒出陣。これは人間魚雷と呼ばれる特攻兵器回天の搭乗員として訓練を受けた際の名札で、菊水の紋を描く。無事復員した瀬川は、再上京を諦め慶應を退学、京都大学を卒業した。慶應から学徒出陣し、戦後無事復員しても復学できなかった者は少なくない。



出撃直前の特攻隊員の会話を記録した手帳(上原良司妹・清子)

昭和20年5月1日条

上原清子氏蔵

上原清子は「自由主義者」と自称する手記で著名な上原良司(経済学部1年で学徒出陣)の妹。兄との最後の面会時、居合わせた学徒出身の特攻隊員達がお茶を飲みながら交わす冗談とつまらない雑談が印象に残り、帰宅後手帳に書き留めた。「死んでから香典貰ふより今の内に貰って遊んだ方が良いな」「あッだまされちゃった、特操(特別操縦見習士官。陸軍の学徒出身パイロット促成課程)なんて名許り良くてさ、今度生れる時はアメリカへ生れるぞ」「之がニューヨーク爆撃なんて云ふなら喜んで行くがな」などとある。良司は10日後に特攻出撃、戦死(陸軍・第56振武隊)。



最後の帰省時の写真(塚本太郎)

昭和19年11月9日

「太郎湯」前の母

昭和20年 塚本悠策氏寄贈(2点とも)

塚本は塾生時代水球部で活躍、経済学部1年で学徒出陣。その際レコードに別れの言葉を吹き込む。左写真は前列中央に目深に海軍帽を被る太郎、その右に11歳年下の弟悠策(昭和34年文学部卒)。左後ろに父福治郎(大正3年理財科卒)。太郎は昭和20年1月21日、回天特攻により戦死。右写真は、太郎の名を冠して昭和24年に開業された銭湯「太郎湯」玄関での母郁子。番台にあった太郎のレリーフは、現在水球部合宿所に設置されている。